研究ノート

人口における質の問題について

——A.ソービィの説を中心として——

室　　三　郎

率直にいって，人口問題において，その質の問題は，その重要性に比して，採り上げられることが少かった—否，寧ら少な過ぎたといって良い．

昭和14年8月，人口問題研究所が発足して以来，真贄な人類学者を中心として，人口の資質の問題が研究せられて来たが，人口問題研究所に，一部として人口資質部が設置されたのは昭和38年4月に至って漸くその日の目を見たのである．

書物に関していどうであろうか．

寡目な筆者の嘱目した限りでは，上田貞次郎著「日本人口政策」（昭和12年千倉書房」が僅かに注目を惹くにすぎない．上田博士は，同書「第一章」の「日本人口問題」の理論的意義の中に一節を設け，「人口の質的側面の研究」として，「人口問題の研究を最も広汎なる意味に解し，これを系統的に取扱わんとする学者は普通にいうところの人口即ち人の数の問題と相並んで人の質の問題を論ずべしとする．質の問題というのは，一国または一社会を組織する分子の肉体上及び精神上の向上または低下の問題であって，一面には社会衛生の研究となり，一面には体質遺伝の研究となり，何れも頗る広汎なる生物学的分野を構成するものである」とされている．

その後，人口の質に関する著述は見られなかったが，最近現れたのが篠崎信男著「人類働態学入門」（昭和47年，同文館）であろう．同書は，既に2版を重ねているが，今までの経済を中心とした考え方の人口問題に対して，一歩進んで，属性という要素を考え，生きがいとは何かを捕え，人間関係を重視し，今までの単なる統計的な人口問題に警鐘を発した注目すべき書物である．

行政的にこれを見ても，先づ昭和37年7月に人口問題審議会は，人口資質の向上を中心として政府に建議し，それは「人口資質向上対策に関する決議であって（昭37.7.12)」それには，外界から人口そのものを破滅させることのないような各種の施策が盛込まれている．

また，ごく最近においては，昭和54年6月，福岡において開催された日本人口学会において，会長曽田長宗先生は「高令人口の量と質」と題して講演せられ，高令人口おいても，生産的な，質の問題の重要性を強調せられた．

このように，人口問題における質の問題かつ近来強調せられて来たことは慨る喜ぶべきことといわねばならぬ．蓋し，いくら人口の量の問題が重要だといっても，肝腎の人口の質が悪くては，問題にならないからである．

篠崎信男氏は，人口問題研究所長に就任せられるや，国連の人口委員会に出席せられ，そこで仏国政府の代表 Alfred Sauvy 氏と，この問題について意見を交換せられた．その際，篠崎所長がかねての持論である人口問題における質の重要性を説かれ，ソービィ氏の意見を求めた所，同氏も全く同感

であるとの意見を表明したのである.

篠崎所長は帰国後，ソービィ氏の著書の中で，この問題を取扱っているものはないかと調べた所，一寸見当らなかったので同氏に問い合わせた所，同氏から早速返事があった．そして，同氏は「人口の質を全般的に取扱ったものではないが，諸処において，それに触れているものとして同氏の著"Coût et Valeur de la Vie Humaine" 人間生命の費用と価値」(1977, Hermann, 293 rue Lecourbe, 75015, Paris) を挙げて来たのである.

そこで，筆者は，フランスの前の国立人口問題研究所長であり，人口問題のみならず，経済学，社会学，環境問題等各般の分野にわたって博学多識な碩学であるAソービィ氏の，人口の質に関する説を以下に紹介することにしたい.

「人間生命の費用と価値」(1977年) は，全篇24章に岐れている仏文にして205頁の著書である.

本書は，大まかにいって，二つに別けられると思う．その前半は，題名の通り，人間生命の費用と価値が年令によって，また，国によって如何に異るかを考察したものであり，後半は，人間生命，人間生活にとって望ましくないもの，老令や種々の精神並びに身体障害者やハンディキャップ者について考察し，長命と良い生命とは如何なるものであるか，更に，人間生活に起る不慮の災害，自殺や戦争や殺戮，事故等にまで言及している.

そこで，私はこの小論では，主として後半の部について，それも人間生命と人間生活の質についてソービィの述べているところを簡約に紹介して見ようと思う.

私は，便宜上これを三つに分けて見ようと思う.

第一は，社会にとって望ましくないもの (indésirable)」老人，その他のカテゴリーの人々 (遺棄された者，ヴァガボンド，浮浪者，精神病者など) を淘汰 (élimination) することによって，人口の質の向上を図ることであり，第二は，長命と善い生命 (Vie longue et bonne Vie) によって，人口の質の向上を期することであり，第三は，人間の価値を認識することによって，徒に多産に走らず，物質的進歩よりも，寧ろこの人間生命尊重の観念によって，人口数を制限し，質の向上により重きを置くことである.

老齢者の問題は本書第十章において，「望ましくない者の淘汰，老齢者 (Lélimination des indésirables les Vieux)」として取扱れているが，小論においては，紙面の関係上，老齢者に限り，他のハンディキャップを負っている人々，精神障害者や身体障害者等については省くことにする.

まづソービィは，人口の老齢化のメカニズムを解明する．彼は，人口において，老齢者の占める比率が高まったのは，人が思うように，人間の生命が延びた結果ではなくて，出生率の低下と，特には乳幼児死亡率の低下の結果であるとする．特に最近乳幼児死亡率が1960年に2.4%であったのが1976年に1.1%になった結果，平均して寿命が一年間延びたという．60歳の者の全人口中に占める割合は，西欧諸国においては18%であって，発展途上国のそれが4.5%，屢々3%であるのに比して，4倍であり，出生率が現在のまま維持されれば，25%にも達するであろうという.

老人が社会にとって望ましくないのは，二つの理由による．それは，物質的に見て，一つは老人が背負う重荷と苦痛とであり，もう一つは，老人が現在活動している人口から，貴重な財貨を奪うことになるからである.

その結果，資本主義国においては，肉体的に老人を淘汰 (éliminer) することではなくて，活動的人生から追放すること，即ち経済的生活から追放すること，具体的にいえば，一国の雇用者数は天然資源がそうであるように限られているから，雇用の分配の問題が起り，雇用市場を自由化するため

に，老人を職場から追放（chasser）すべしとする．ソービィは，これを，素朴なマルサス主義とする．そして，この事象は，最近行政当局によって押し進められていると説く．かくて，ソービィは，現在社会の関心は，老人を経済生活から追放することにあり，特にそれは，フランスにおいて著しく，老人を退職させて，多くの花やその香に囲れた生活に置こうとすることに在るとする．

これに対するソービィの反論は，老人がその機能を適度に充たすことが出来なくなったとき，これを解雇することは，正当と認められようが，凡ての人に対して，ある一定年齢以上に達した場合，職を禁ずることは，なすべきではない．フランスの民族学者 A. Métraux は，1963年4月に自殺したが，彼の自殺は不当に早く退職を強要されたためであって，彼は，社会が自分を追放しようとする残酷な態度を嘆いていたのである．

ここにおいて，ソービィは疑問を提出する．一体老人は肉体的に見て，淘汰されるべきであろうか？，老齢になって，資産は減少し，生活様式は急激に変化するが，それは生命そのものにとって不利なことであろうか？換言すれば，退職は果して死を急がせるものであろうか？

ソービィは続ける．退職になると，人間は死ぬ機会が増すと一般に主張されているが，それは正確統計に基いているものではない．仮りに統計的に証明されたとしても，その解釈は難しい．何となれば，何が原因で，何が結果であるかを見なければならないからである．それは誠に難しい．このことは退職のみならず，老人病院や老人ホームに老人を入れる場合も同様である．これに関連した統計がないので，われわれは，医者や心理学者の観察に頼らざるを得ないが，それによれば，特に男性において，全活動から非活動に急激に移ることは，肉体の均衡上良くないという結果がでている．人間生命の価値との問題に立帰れば，老人は望ましくないという考は，老人を老人ホームや老人の村などの考に現れているが，老人が他人と接触することを禁ずること，老人は若者や子供を見ることを愛するのに，これを老人ホームなどに閉し込めておくことは，良くないことである．

結論として，社会の老人に対する態度は，凡ゆる場合に声高くいわれている．老人を含めて，社会全体の連体性（Solidarité）を固くしなければならないという現代の社会の関心と，老人は重荷を背負っているから，その重みから社会を解放しなければならない，という二つの考の不安定な妥協が現状であるといって良い．何時の日にか，この社会の荷う重荷に対して激しい反動が起るであろうし，それは敢ていえば，自然的な，本能的な淘汰への機会ともなるであろう．しかし，成人や老人もまた，このような紛争に対し，その今までに蓄積した資質によって，生きる権利を主張し，青年に対して，拒否的な態度に出るであろう．

第二に，ソービィは，本書第十五章において，「長い生命と善い生命」と題し，人口の質に関する重要な問題たる，生命の重要指標たる，平均余命（espérance de Vie）の問題を論ずる．

周知の好く，平均余命は次の如き数式によって表はされる．

$$E_a=\frac{V_{a+1}+V_{a+2}+\cdots\cdots}{V_a}+\frac{1}{2}$$ （V_a は Et における生存者数，E_a は同年における平均余命）

ソービィは，これを「古典的平均余命」と呼び，これに異議を唱える．そして「質的に，より良き平均余命を求めよう」とする．（同書142頁），彼はいう．古典的平均余命計算法には，重大な欠点がある．何となれば，この数式においては，各年齢における階差は，凡て等しいとされているが，各年齢における死亡率の階差は等しくないであり，とくに先進諸国における近年の死亡率の低下は顕著な傾向であるから，質的に，より良い平均余命を求めなければならないとする．しからば如何にしてこれを求めるか？以下彼の所説を要約すると，各年はそれぞれ異っており，良い年も悪い年もあるのであるから，質の概念に適合した重要さの係数（un coefficient de pondération）が各年に作用する．で

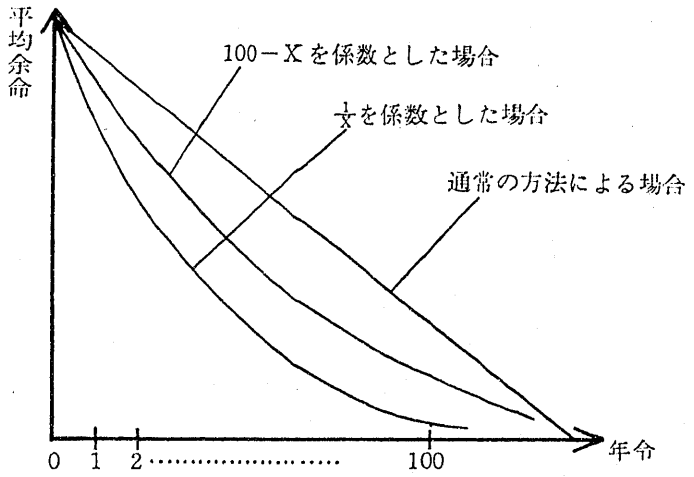
は，その重要さの係数を決める要素として，如何なるものを択ぶべきであるか？即ち

新しい平均余命は，$E_a=\frac{(C_{o+1})V_{a+1}(C_{o+2})V_{a+2+}\cdots\cdots}{V_a}+\frac{1}{2}$

であり，C_oを決定するものは何かということである．

その第一は，(1)年齢自身である．平均余命↑ →年齢 の図の如き場合，普通年齢が増加して行くものとしているが，それが自然年齢そのままではなく，それに減少する係数を掛ける方法である．例えば，xtの場合，その逆数（inverse）$\frac{1}{x}$を係数として掛ける．例えば，10才の場合，V_{a+10}に10の逆数$=\frac{1}{10}=0.1$を採り，$0.1\times V_{a+10}+0.1\times V_{a+11}\cdots\cdots$として行く方法である．

もの一つは，100の補数（le complémtàtion）即ち$100-x$を係数とに掛ける方法である．最後に残るのが，古典的な，通常の年齢の採り方である．これを図で示せば．以下の通りになる．



(2)は，平均余命，そのものについての考である．普通は，幼少年の方が平均余命が長いから，成年や老熟した人よりも良いと考えられているが，彼等幼少年には，力も，自由もないから，一概に彼等の方を勝れりとすることは出来ない．人口を質的観点からみて，このように考える人は多いのである．

(3) 肉体的筋肉力．これは，規準によって，その最大限の力が何歳の時にあるかは容易に測れるであろうが，人間の生活そのものについて考えると，スポーツの場合を除いて，何時が最高であるかを決めることは出来ない．

(4) 知力，普通これは，経験の蓄積によって測られる．従って若い年がいいとは一概にいえない．また各職業間に対して，知力の相違を測ることにも困難がある．

(5) 生殖力．最後に生殖力がある．これは男性に就てしかいえないことだが，幼少年時代は，この点に関し零である．そしてそれは，可成りの年とった人にも劣るのである．

こう見てくると，質的に見て，如何なる歳の平均余命が良いか悪いかを決定する満足な解決方法はないといって良い．こういう場合，人間は最も単純なものを採りたがるものであって，これが幾多の欠点があるにも拘らず，従来からの平均余命計算法それは各年が等しい質を持っているとされているが大方の支持を得ている所以である．

第三に，人口の質についてソービィの述べていることは．人間生活の進歩は物質的なそれよりも，人間生命の価値を意識することから生ずる．即ち，人口減少，出生率低下の現象も，産児制限の技術

よりは，人間の心理過程を分析して，これを考察することが大切である．即ち，いくら人間が殖えても，それが生産的でないならば，人口の質を貧困化するだけであって，人間の質を尊重し，人間生命を尊重する観念が，産児制限に至らしめるのである．これ，シンガポールや香港や台湾において近年出生率が低下し始めたのは，産児制限計画が発展する以前からであって，それは人々が，叙上のことを意識し始めた結果に外ならない，とソービィは説く．（同書183頁）．

このことは，人口の質は，人口の量になるものではなく，人口の質を向上させる意識と，その振舞（comportement）に在ることを，はっきりと述べたいので，従来の統計的人口学の書物には見られぬ所といわねばならない．